都川水の里公園　千葉県生物部会研修会

植物は土地の語り部

山岸 文子（千葉市）

日　　時：2025 年 8 月 27 日（水）9：30〜11：00　　天気：晴
参　加　者：7 名（県立高校生物担当教員）
担当指導員：畫間　山岸

猛暑の中での研修会。管理棟内で注意事項の説明後、白鷺橋の中程まで歩く。都川は昔から暴れ川で人々の苦労が絶えなかったこと、橋の下を流れる支川都川は昭和後期に治水のために作られたこと、現在は耕作放棄地となっている広大な土地に大規模な公園建設を千葉市が計画していることなどを話す。日射しは容赦ない。温度計が39℃を越えた。階段を降り自噴井太郎へ。昔ながらの湧水でこの辺りで一番大きいから「太郎」、飲用には適さないが水田には欠かせない大切な水源である。

稲作体験講座の田んぼは既に稲穂が出揃っている。畫間指導員から水田雑草についての詳しい説明。タカサブロウ、コナギ、オモダカ，強害草でも花は可憐。小川のマコモ、お盆のお供え物をのせる、小さなスダレ様に編んで背負い夏の農作業の日避け、葉をお茶にと馴染みの草。繊細な花を案内すると「えーっ、マコモに花が咲くの？」と意外な反応。とくとご覧あれ。

桜の木蔭に入って水分補給。6年前の大雨で川が溢れ地面から154㎝の高さの枝に枯れ草が引っ掛かった写真を見せる。少なくてもこの高さまで水が来たと説明。

アミミドロの網目、ハスの葉柄の穴を観察。タコノアシの花は秋になると赤くなり茹ダコの足のように見える。千葉県には普通に自生、全国的には極めて少ない。右手にコシヒカリ左手に古代米緑米の田んぼ、それぞれの畔には枝豆を栽培している。緑米は収穫がひと月遅く、枝豆は稲刈り後の畦に隠れ場所を作る。この環境が気に入ったのか5年前からヒクイナの繁殖地となった。ヨシの葉がよじれている。虫の仕業に非ず、「きつねむすび」と呼ばれる風のいたずらとヨシは語る。鮮やかなミソハギの花、爽やかな香りのハッカ。藪の周りを歩く。小さい池がいくつも造られていて真ん中には島がある。カエル、トンボ、島はカルガモの子育てのためと話す。畑を横切りトウネズミモチの木蔭に避難。堆肥の中からシラホシハナムグリの繭が見つかったと写真を提示。関東南部では30年前に絶滅したと考えられているが市販の腐葉土に紛れて別の場所から運ばれ繁殖しているのかもしれない。この公園は様々な生き物たちのオアシス。但し必ずしも生態系バランス良好とも言えない。スッポンの卵を掘り出して食べつくしたり、逃げ回るカメを追いかけ稲を踏み倒したりとアライグマの悪行が目立つ。今後のこの場所の課題を示して締めくくる。

猛暑の中の研修会

木蔭でほっと一息

きつねむすび